# 大東製薬工業マンスリーレポート

Vol.5 女性ホルモン補充療法について② (2010年5月25日発行)

# 閉経後女性のひそかな悩み(1)

-外陰部の乾燥と「かゆみ」-

更年期以降の婦人では、女性ホルモンの低下により様々な症状があらわれることはよく知られています。のぼせやほてり、 頭痛や不安感、骨粗鬆症などは「更年期障害」の代表的な症例ですが、あまり知られていない症状として、女性性器の乾燥 による「かゆみ」があります。皮膚や粘膜の乾燥症状の一つであるため、これまではあまり重要視されてこなかった症状で すが、近年の「生活の質(OOL)の改善」を求める社会的な背景もあり、注目されてきています。

#### 「かゆみ」の種類

外陰部のかゆみは、病態としては感染によるものとそうでないものに大きく分けることができます。

- (1) 感染によるもの: カビの一種であるカンジダ菌、白癬菌などの感染よる膣外陰炎が主な症状です。それぞれの原因によって症状の程度も様々ですが、治療法も全く異なります。
- (2) 感染以外のもの:女性の外陰部は皮脂腺・汗腺に富み、膣や子宮からの分泌物により常に湿潤な状態にあります。衣服、性生活、尿、便などの刺激にさらされており、これらの付着が原因となる外陰炎やアレルギー性の皮膚炎がおこりやすくなります。また、更年期以降では膣粘膜や外陰部の乾燥・萎縮が原因となる外陰炎がおこりやすくなることが知られており、人知れず痒みに悩まれている方も多いようです。

### 乾燥・委縮の原因は?

閉経後、卵巣からのエストロゲン(女性ホルモン)分泌量は急激に低下します。 閉経後 2~3 年間は 20~30 pg/mL に、それ以降は 10 pg/mL 以下になります(右表参照)。 高齢女性における皮膚の乾燥や委縮は、血中の女性ホルモン分泌低下に伴うものと考えられています。

膣においては、閉経後徐々に膣管が短く狭くなっていき、膣粘膜も薄くなっていきます。膣粘膜は性生活の内容によっては、閉経後 10 年間ほどは中間 細胞がほぼ保たれることもあるようです。しかし、老年期に向かうにしたがって中間細胞層の委縮が見られるようになり、膣粘膜の含水量・グリコーゲン量が減少します。

測定時期	エストラジオール
	(pg/mL)
正常性周期	10~80
卵胞期前期	50~230
後期	120~
排卵期	120~390
黄体期	10~200
閉経期	<30

外陰部の場合は、大陰唇の皮下脂肪組織の減少、弾力線維の減少により、薄く小さくなっていきます。また、粘液腺(バルトリン腺・スケネ腺)などの分泌機能も低下するため、外陰部は適度な湿潤性を保ちにくくなります。このような状態が進行していくと、乾燥した肌に痒みを感じることが多いように、外陰委縮症・外陰そう痒症が生じることになります。さらに、年齢が高くなるにつれてその発症数は増えていくと考えられています。

## 治療方法

更年期以降の外陰部乾燥・そう痒症は、ホルモン補充療法により多くは改善することが知られています。ただし、痒みだけを解消したいと考える患者さんの場合は、全身的なホルモン療法を希望しないことが多くあります。そのような患者さんに対しては、エストロゲン膣錠がこれまで用いられてきました。しかしながら、膣錠による治療の場合、膣内が乾燥していることによって錠剤が溶けきらず、満足のいく治療ができない場合も多いようです。

海外ではこのような患者さんに対して、エストロゲン含有クリーム剤が有効であることが報告されています。ヨーロッパでは 1980 年頃からエストロゲン含有クリームの有用性が認められており、エストロゲン膣錠と同等の効果があることも報告されています。



特に、外陰部の乾燥・そう痒症に限定した場合、低用量のエストロゲン含有クリームの局所投与が有効であるとされています。

#### 国内の状況

日本女性の平均寿命は約 86 歳で、24 年連続世界一となっています。更年期の年齢が 50 歳前後ですから、更年期以降 40 年近くの時間があることになります。閉経後に必要なケアとしては、骨粗鬆症や高脂血症の予防などといったものがありますが、QOLの改善という意味では、外陰部・膣の委縮も軽視できません。

国内においては、エストロゲン外用ゲル剤が上市されていますが、ゲル剤にはアルコール成分が含まれているため、乾燥した肌に塗布するのが困難です。このため国内の医療機関では、エストロゲンの外陰部局所投与の方法としてエストリオール



(女性ホルモンの一つ) 膣錠の他に利用できる製剤がないのが現状です。膣錠が困難である場合は、白色ワセリンにエストロゲン製剤を溶かしこみ、院内製剤として使用している医療現場も多いようです。

国内の OTC 医薬品であるエストロゲンクリーム剤「バストミン®」(マンスリーレポート Vol.1 でもご紹介)は、外陰部への

直接投与で外陰部そう痒感の改善効果が認められています。基剤成分が一般的な化粧品と変わらないクリーム剤ですので、刺激性が少なくなっています。また有効成分量も、医療用医薬品に比べると低用量ですので、局所的な改善効果のみを望むお客様に適しています。欧米で効果が認められている低用量エストロゲン含有クリームが国内には無いという現状の中、外陰部の「かゆみ」を治療できる数少ない選択肢の一つとして、お試しください。



【 次号予定】 HRT のリスクとベネフィット -結局、どの方法がいいの?-

#### ご感想・ご質問、お待ちしています。

(お名前・屋号・所在地・ご連絡先電話番号またはメールアドレスをお書き添えいただけましたら、もれなく薄謝をお送り致します。)

【 宛先: 大東製薬工業マンスリーレポート係 】 FAX: 03-3954-2507 E-mail: info@daito-p.co.jp

発行・宛先:大東製薬工業株式会社 マンスリーレポート係

東京都豊島区南長崎 4 丁目 36 番 13 号 お客様相談室: 0120-246-717 URL: http://www.daito-p.co.jp/